

広島大学大学院人間社会科学研究所
人間総合科学プログラム（博士課程前期）
入学試験（令和7年8月実施）

受 験 番 号						
M						

問題用紙 **専門科目** [**一般選抜**]

【問題】

敦煌文献の文学文献研究上の重要性について論述しなさい。その際、以下のキーワードすべてについて触れること。

キーワード：ポール・ペリオ、莫高窟、羅振玉、李盛鐸、狩野直喜、鄭振鐸、向達、変文、儀礼文献、杏雨書屋

解答例

専門科目

[一般選抜]

【問題】

敦煌文献の文学文献研究上の重要性について論述しなさい。その際、以下のキーワードすべてについて触れること。

キーワード：ポール・ペリオ、莫高窟、羅振玉、李盛鐸、狩野直喜、鄭振鐸、向達、変文、儀礼文献、杏雨書屋

20世紀初頭、甘粛省敦煌の莫高窟において発見された大量の文献群、いわゆる敦煌文献は、東アジアの文学研究にとって比類のない資源を提供してきた。これらの文献は宗教經典のみならず、歴史記録、儀礼文献、書簡、契約文書、そして散文や韻文などの文学作品を含み、その広がり多様性によって、中国文学研究の枠組みを大きく変革させた。以下では、その研究史的展開を踏まえつつ、敦煌文献の文学的意義を考察する。

まず、敦煌文献が学界に登場する端緒は、フランス人東洋学者ポール・ペリオの活動による。彼は1908年に敦煌莫高窟の藏經洞を訪れ、大量の文献を収集しパリに送った。また収集品の一部を1909年に北京で公開し、清朝の学者たちに敦煌文献とその価値を知らしめることになった。またペリオの調査は、敦煌文献が単なる仏教經典の集積ではなく、世俗的な文芸資料をも含むことを示した点で画期的であった。その後、彼の収集品はパリ国立図書館に収められ、欧米における敦煌学研究の礎となった。

一方、中国においては、敦煌文献をめぐる収集と研究の担い手として羅振玉と李盛鐸の名が挙げられる。羅振玉はペリオの収集品を目にして驚愕し、敦煌に残される文献の保護、収集を求めた。かくて清朝による敦煌文献の調査と収集が始まり、敦煌から流出した写本を積極的に収集する活動が始められた。羅振玉は1924年に『敦煌零拾』を刊行し、敦煌変文の初期研究を提示したが、これは文学文献としての敦煌資料を注目させる端緒となった。李盛鐸もまた大量の文献を秘蔵し、その後の学界に大きな影響を与えた。今日の日本の杏雨書屋所蔵の敦煌文献のうち、李盛鐸旧蔵本が中心となっている。

日本においても、敦煌文献研究は早くから関心と呼んだ。その代表的な学者として内藤湖南や狩野直喜がいる。狩野は京都学派を代表する東洋学者であり、敦煌文献の文献学的・仏教史的意義を強調した。狩野は文献の系統や成立年代の考証に尽力し、日本における敦煌学研究の学問的地盤を固めた功績を持つ。彼の研究姿勢は、後の文学文献研究にも深い影響を与えている。敦煌の文学文献に関する初めての論考「支那俗文学研究の材料」（1916年）は、後の変文研究、俗文学研究の基礎となっていた。

文学的観点から敦煌文献を積極的に活用したのが鄭振鐸である。彼は中国近代文学研究の先駆者であると同時に、俗文学の系譜を明らかにしようとした学者であった。鄭は敦煌変文を民間文学の貴重な資料として評価し、中国文学史における口語文芸の位置づけを再編した。敦煌変文は韻文と散文が交錯し、物語性を豊かに表現する独自の文学形式であり、唐代以降の説話文学や話本小説の源流を考える上で欠かせない。

さらに向達は、『唐代俗講考』（1934 年）を著し、敦煌変文を説経・俗講の文脈に位置づけた。その研究は、敦煌文献を仏教文献研究に閉じ込めるのではなく、社会的実践と結びついた文学的現象として捉える視点を開いた点で重要である。向の成果は、その後の変文研究や中国語史研究にも大きな影響を及ぼした。

敦煌文献には変文や詩歌とともに、葬送や祭祀に関わる儀礼文献も含まれている。これらは文学資料と交錯しつつ実用的性格をもつ。儀礼の文言には詩的表現や口承的要素が混じり、講唱文学の発展研究、文学発展研究上も豊かな資料を提供する。

また、敦煌文献の整理・保存において、日本の杏雨書屋の存在も忘れてはならない。杏雨書屋は大阪の藤井斉成会が設立した東洋学研究資料館であり、中国から購入・寄贈された敦煌文献を多く所蔵してきた。そこに保存された写本は、散逸を免れた貴重な文献群として、国際的な敦煌学研究に大きく貢献している。先にも上げる李盛鐸収集資料をはじめ、日本で最も多くの敦煌文献を所蔵しており、その図録『敦煌秘笈』を刊行するなど敦煌研究に貴重な資料を提供し続けている。

以上のように、敦煌文献は発見当初から国際的な学者の関心を集め、文学文献研究に計り知れない価値を提供してきた。ペリオによる収集が西洋での研究を開き、羅振玉や李盛鐸が中国における基盤を築き、狩野直喜が日本における学問的展開を担った。そして鄭振鐸や向達が文学的視点からその意義を明確化した。変文や儀礼文献を含む多様な資料は、中国文学史を従来の「文人中心史観」から解放し、庶民的文芸や口承文学の研究を可能にしたのである。